

コメンテーター

シンポジウムの感想

札幌大学経済学部客員研究員・クイーンズランド工科大学 クリストファー・ポカリエ

すみません、本当に上品ではない日本語で、私の本当に一番伝えたいことを伝えられるかどうか余り自信がなくて、でも一応何か話してみます。

やはり黒柳先生、菅井先生、渡久地先生、松本先生の話の内容を聞いて、何か私の国オーストラリアとの経験とものすごく似ているところが多いと思ってきました。何よりも私の一番大きな印象はそれですね。基本的には何かそういう政策のジレンマとか特に地域経済の大きなチャレンジとか、やはりオーストラリアとものすごく似ているところあるのですけれど、今現在のオーストラリアと現在の日本の地域と比べたら一つのものすごく大きな違いがあります。

オーストラリアの経済は今 OECD の国の中では一番で、景気は日本が一番悪いですね。この 10 年前ぐらいからオーストラリアは大分経済的に回復してきました。なぜかというのは、やはり日本より早くいろんなかなり大きなチャレンジに取りかかっており、基本的にはオーストラリアの低迷していた経済で企業行動に対した考え方とか、完全に転換しなければならなかったのですね。

あまり時間がないから少し短い言葉で少しオーストラリアと日本の似ているところを言ってみたいと思うのですけれど、やはりオーストラリアではタスマニアとかタスマニア島とか、簡単に言えば、大陸の中の方のある地方とか、小さい町とかがはっきり言ってもう経済的に死にかかっている。100 年前からそういう傾向があります。いろんな景気対策とかはもう 100 年

前からあったのですけれど、何回も地方景気対策を行なおうという声がいっぱい出てきて、何回も実現しようとしたんだけど、結局どうしても何も効かなくて、経済的に死んできた地方もかなりあります。

カナダとかアメリカとかも行くと、本当にそういう死んだ町どこにもあります。例えば去年アリゾナに行って、ドライブしてもかなりものすごく暑いところですが、アリゾナではもう 100 年前に 5 万人ぐらいの町が本当に完全に死んでしまって、ものすごく砂漠状態ですから、地震とかもないからもう本当に町がそのまま残っている。だけどだれもいないのです。ゴーストタウンと言われているところ結構あります。

だけどそれはいろんなところにありますね。カナダ、オーストラリア、アメリカでも。だからやはり日本にもあるのは当然ですね。やはりオーストラリアでも死にかかっている産業もあります。特に渡久地先生の分析の結果を見て、やはりサトウキビの産業は非常に苦しい状況に入ってますね、沖縄では。

実際に私はオーストラリアのクイーンズランド州から出ているのですけれど、クイーンズランド州の一つの主な輸出は昔からサトウキビですね。だから結構昔から沖縄の競争相手になってきたのですけれど、今年からやはりサトウキビの産業がもうだめだという声が多くなっていますね。世界市場の値段を見ると、10 年前と比べたら 8 割ぐらい下がってきて、それでしょうがなくて、サトウキビの生産をあきらめている

家族も多くて、やはり大都市の方に住みに行く人が多くなってきました。

だから、やはり州政府とか連邦政府はいろいろ対策、政策を考えようとしているのだけれど、結局それは回復させる方向を見つけられなくて、基本的に経済的な被害者の苦しみを少し減らすために、結局産業をあきらめてもらうために、いろんな手伝える考え方を今考えています。

だから基本的には今のオーストラリアの政策と30年前のオーストラリアの政策はまるで違います。最近の考え方は基本的に構造調整の下での被害者のサポートをするための政策ですね。結局死にかかっている仮死状態に入っている産業を回復させる方法ではなくて、何よりも生産者を減らす方法を探しています。産業から出てもらうためにいろんな助成とか手当とかを出して、そして結局、その地方から出てもらうためにお金を上げます。

そういうサトウキビだけではなくて、いろんな産業を見ると、特に九州や北海道と昔からライバルになっているオーストラリアの産業でも似たような問題が出ています。そういうリプレーの怖れが本当にすごいんですね、オーストラリアでも。そのリプレーで吸収や合併とか失業者とかが結構10年前ぐらいから出ているのですけれど、多分日本と違って非常におもしろいのは、利益が大分出てきています。特に石炭の場合ですが、石炭の輸出がもう大分増えてきたのだけれど、一般的には石炭価格が大分下がってきたのだけれど、量を大幅に増やして、でも石炭を輸出している会社が少なくなって、残っている会社が余計にもうかっていますね。だからそういう合併とかでコストを減らす方法、作戦で大分強くなっている会社もあるんだけれど、結構被害者も多く出てきたのですね。

ある意味でそれは本当に典型的なアメリカン・スタイル・キャピタリズム、西洋的な資本主義ですね。本当に難しい選択をして犠牲者がいっぱいいてもしょうがなくて、残っている会社を強くするために特に難しい選択をする方法多いのですね、オーストラリアは。

やはり、オーストラリアの経験を見ると、日本の将来がはっきり言って、そういう地方の将来は、私にとってそんなに楽天的なところではないと思います。例えばオーストラリアの金融機関の経験で見ると、ものすごく大きな変化があります。この20年間の間に、金融機関は支店を減らして人件費も減らして、人を首にするのは本当に当然のことになっていて、だからこの10年間の間にオーストラリアの主な四つの銀行では6割ぐらいの支店を閉じたことがありました。けどまだまだ日本では、それは始まっているだけだと思います。だからそれが北海道とか九州とか沖縄で進むと、やはり失業率とか余計に高くなると思います。

そしてオーストラリアではもう一つの大きな心配があります。英語でブランチ・エコノミー、支店経済になるのが大きな心配ですね。松本先生のデータを見ると、九州とか北海道では、全国の子会社とか全国にある会社の支店が非常に大きな経済的な影響があるのですが、オーストラリアでもそうですけれど、違うのはオーストラリアの場合は、海外から直接に投資しているもうけなしの他国企業が本当に大きいのですね。例えば鉱業です。特に石炭産業では、オーストラリアの会社は非常に少ないのですね。本当に世界の最大のマイニングカンパニー、全部オーストラリアに直接投資しています。だから、確かにオーストラリア人も結構心配していますね。支店経済、ブランチ・エコノミーになっているのではないかという心配はあるのですけれど、でも結局それで、そういうトップクラス、ミドルクラスの会社は生産性がすごく高くて、はっきり言ってすごく上手に資本を使っているから、結局オーストラリアの経済にもものすごく大きな良い影響を与えています。

オーストラリアのトレンドを見ると、簡単に言えば、死んでる地方と久しぶりにまた発展している地方の両方同時にありますね。だからそういう大都市化というトレンドも実際にあります。それでオーストラリアでは、結局アメリカとかヨーロッパより都市化率が非常に高いので

す。しかし、日本人のオーストラリアに対するイメージは国が広くて、牧場が多くて、人が少なくってというのでしょうか、実際にはオーストラリアの社会の例を見ると都市化がものすごく進んでいますね、昔から。なぜかというのは、田舎にある産業はヒューマン・インテンシブでなくてキャピタル・インテンシブ。人材より資本の方をよく使っている産業ですから、だから多分日本と違って非常に一つの大きく違うことがありますね。昔から伝統的にたくさんのオーストラリア人が大都市を出て行って、田舎にいて稼いでいた。働いてそして少しもうかったら、また大都市に戻る習慣がありますよね。だからそういう人口の動きが本当伝統的にフレキシブルなパターンになっていますね。

でも最近一つの非常におもしろいトレンドがありますね。ベイビブーマーが大都市を出て田舎に住むことが多いのですね。アメリカにも見えるのだけれど、オーストラリアは5年前ぐらいシーチェンジという一つのドラマですごい人気ありました。1人の弁護士がメルボルンで勤めているのだけれども、離婚して大都市の日常生活が嫌になって、だから大都市を出て、小さなビーチタウンに住みにいくドラマだったんだけれど、それですごいブームになって、そういうシーチェンジ、シーチェンジにはもう一つの意味があるのですけれど、完全に違う生き方にするとかという部分もありますね。

だからそういうふうに、今までに結構不景気のいろんな地方が大分回復してきたんだけれど、一つの基本的な根拠ありますね。死にかかっている町と生き返ってきた町、発展している町では同じところもあるんだけれど、そうでないところが多いのです。例えばシドニーからちょっと下に行くと、室蘭みたいなウルゴーという町があって、そこが大分死にかかっている。だれもそこに住みたくないのですね。イメージが悪いのですけれども、もうちょっと南の方に行くと、今までにだれもいない美しい景色のあるところに新しい町がいっぱいできている。そしてビレッジが結構回復してきたのですね。そ

ういうベイビブーマーが、トレンドの中から大都市から出ているケースも少なくありません。

やはりそういうオーストラリアの社会的な変化を見ると、日本に役に立つベースがあるかどうか、少し考えたくなってきました。あるかどうかはよくわからないのですけれど、皆さんに自分の目で見えてほしい。もしできれば、機会あればオーストラリアに行つて欲しいと思います。

基本的にオーストラリアから見習えるレッスンは、やはり田舎から若者が実際に出たくなる。それは当然のことだと思いますね。若者はそういう冒険性がありますね。はっきり言って田舎はつまらないですね。子供のときはおもしろい、すごくおもしろい。僕は子供のときに田舎に住んでいてすごくおもしろかった。毎日学校が終わって森まで遊びに行つて、すごく楽しかった。やはり18歳になるとおもしろいところへ行きたいでしょう、それは当然のことですね。彼らもそれは当然。だからそれをちゃんと政策的に認めて、チャレンジは後で戻ってもらうこと、それが可能にしてやる。それが何よりもポイントだと思いますね。

やはりオーストラリアの経験を見ると、みんなが分かってきたのは、田舎に残っている人はものすごく責任あるね。自分の住んでいるところを磨かなくてははいけない。その住んでいるところの魅力を見せなくてははいけないのですね。だから自分の町を上手にマーケティングしなくてははいけないのですね。自分の町から出た若者にだけではなくて、そういう若者の友達とか大都市で生まれた人とかに、自分の町を上手にマーケティングしなくてははいけないのですね。それは町だけではなくて地方のマーケティングも非常に大切です。

日本でも全く同じことであると思うのですけれど、やはりアイルランドとかシンガポールとかそして米国のサウスカロライナ州とか、ちょっと自分で言ったら偉そうに聞こえるかもしれないけれど、オーストラリアのクイーンズランド州の州政府とかの臨時のマーケティング

のやり方からいろんなこと影響を受けたと思いますね。本当に上手にやっています。それは一つのプロフェッショナルになっています。実際にオーストラリアにいる友達は、オーストラリアのクイーンズランド州の投資促進局の局長だったのだけれど、今クイーンズランド州の日本のところにいる代表になっています。

2週間前に彼と一緒に飲みに行っていて、東京で、例えば北海道とか沖縄とか九州を、特に他国企業に直接投資の行き先としてマーケティングしなければならなかったら、どういうふうにマーケティングすると彼に聞いて、彼すごく詳しいから、日本のことも詳しいから、彼の意見を是非聞きたいと思って、彼に聞きました。彼が言ったのは、ザッツ・ハード・トゥ・セルとか言ってしまって、もう難しい、すごく難しい。どうしてそれは難しいのと聞いて、彼がそこで言うのは、やはり日本のコストがまだすごく高いのですね。オーストラリアの場合を見ると、何よりもオーストラリアは多分10年間のこの景気の一つの大きい理由が、オーストラリアの豪ドルの為替レート、特に米ドルとユーロと円に対しての為替のレートが大分下がってきた。だからオーストラリアは大分安くなってきたのですね。はっきり言って。だからコストは、米ドルとか円とかユーロで見ると大分下がってきた。基本的にオーストラリアは小さな国だから、特にそんな大きな金額が必要な工場とかは、あまりオーストラリアに投資しないから、だから理由があるのだけれど、基本的にオーストラリアの豪ドルが下がったから競争力が同時に強まってきた。

それはやっぱり国民として海外に行くと、やっぱりそういう感じですね。買えるものが少なくなる。10年前最初日本に来たときに、1ドルが120円だったのに、今はもう68円ぐらいですね。だから私のオーストラリアの大学の給料を使って日本に来ると、本当に苦労するですね。特別な手当もらわないと毎晩吉野家とかでしか食べられないですね。本当に大変ですよ。でもかわりにオーストラリアがすごくよくなってま

すね。

だから日本にいるのは非常に大きなジレンマがあるのですね。一般的には日本人はすごい貯金を持っていて、円も高くて、アメリカが一番世界一だと思うのだけれども、経済大国として日本人は海外でものすごくパワーありますね。でも国として本当に強いだろうか。やはりこの地方だけのチャレンジではなくて、これはやはり国のチャレンジが必要です。

基本的にまだ日本はものすごく黒字になっている。だからやはり全国的に地方経済に対する政策を決めることだと思いますが、同時に地方、町に住んでいる人たちは一人一人で責任をとらなくてはいけないと思いますね。自分の地方とか、自分の町をマーケティングするために責任をとらなくてはいけないのです。

これはかなり失礼な意見ですけど、私は日本の味方になっているからこういうことを言えると思いますが、私は日本の田舎に行くと、よくがっかりするんですよ。本当によくがっかりする。特に最近そういう環境産業とかがすごく大切だと、そういう意見を聞くのですけれど、日本の田舎に行くと、汚いところ多いのですね。

私も最近苦小牧、室蘭、イタンキの方に行っていて、ものすごくショックでした。ふだん電車で通っていて、ああ、この海岸美しいなと思って、一度電車おりて、イタンキまで、室蘭まで歩きました。ビーチに着いたときに、もう本当にごみが信じられないぐらい集まっていて、何で室蘭の市民が自分できれいにしないと、町の中を見てもぼろのところが多くて、思ったのは、室蘭の方がいると失礼ですけど、何かこの町の人たちが汚れになれ過ぎていると思っていて、あきらめている。オプティミズムがなくなっていると感じたんですね。

イギリスの死にかかっている町もありますね。ウェールズの本当に死にかかっている町とかもあって、何か似ていると思って、もう本当にこういうところを見ると、本当落ち込むのね。イギリスでも特にウェールズでは、そしてオーストラリアもアメリカ、特にペンシルベニアで

も個人でまちづくりの活動が始まっている。だからこの町をつくり直したかったら、回復して欲しかったら、とりあえず自分のうちで始める。ペンキを塗って、きれいな家をつくって、ごみを拾って、そうしないと、やはりどこで工場をつくろうかどう悩んでいるビジネスマンがその町を訪ねると、やっぱりここはだめだ、市民の力が抜けているとか、エネルギーがない、オプティミズムがないから、こういうところで工場をつくるわけないと思われてしまうのですね。だから、やはり全国的な問題だけど、町の課題で、それは昔からイギリスとかオーストラリアでそういう市民のレベルで回復する活動がありました。

時間がないから、最後に言いたいのは、やはり日本のストレングス、強いところをちょっと

見てみたいと思いますね。

やはり何よりも日本の人材は素晴らしいと思います。教育のレベルも高く、そしてやはりインフラストラクチャーもすごくて、だからすごくい点もありますね。だから地方と町のマーケティングするときにそれをチームにして、そういうそれで結構アピールできると思うのですね。投資を増やすことができると思いますね。それは何よりもすごく大切な方法と認められています。友だちも同じことを言っていました。やはり日本の地方をマーケティングするときに、やはり日本の素晴らしい人材に集中した方がいいと言いました。皆さんの発表していただいた研究が非常におもしろくて、もしできればまた共同研究をしたいと思います。